



## 特別寄稿

# エンベディッド・ライブラリアンをめざして — 病院図書館の課題解決に向けたビジネス・フレームワークの活用 —

佐藤 正恵

## I. はじめに

本稿は、小規模な病院図書館の課題解決を考える上で効果的な手段の一つである経営学のビジネス・フレームワーク活用について、主に初任者や経験の浅い担当者に向けて紹介し話題提供をするものである。

筆者は司書資格を要件として就労し30年になる。これまで、大学図書館、ソフトウェア企業、国際研究機関ライブラリー、母子保健・子ども家庭福祉分野のWebジャーナル制作、急性期病院図書室および患者図書室などで、正職(社員)・派遣職員・非常勤職員など、ワークライフバランス上さまざまな雇用形態を経験してきた。現在は社会人学生として通信制大学院で情報学を専攻している。

病院図書館は小規模で、かつ担当者は司書などの情報専門職であってもソロ・ライブラリアンや他部署兼務、また有期雇用であることも多い。人的資源や情報資源をより強化し、親機関や社会からの認知度を高めるため、より明確な戦略と効率の良い運営が求められる。そこで、企業や非営利組織などで経済活動を行う社会人のいわば共通言語であるビジネス・フレームワークをより意識して業務に取り入れることで、長期的視野に立ち、根拠のある図書館運営や個人のキャリア形成もしやすくなると考えている。経営学は医療職の管理職研修などでも取り上げられるため、レファレンス上の知識としても必須

である。

なお、本稿は2014年7月27日、第31回医学情報サービス研究大会(MIS31)における口演発表「エンベディッド・ライブラリアンをめざして—病院図書館の課題解決に向けたビジネス・フレームワークの活用—」に補足したものである。発表・本稿ともに筆者の私見によるものであり、何らの組織の意見・見解ではない。また、医療法では「図書室」とあり、病院図書館・医学ライブラリー・情報センターなどさまざまな呼称があるが、「病院図書館」と表記する。

## II. ミッションとゴールの設定

いわゆる医療の2025年問題に向けて、病院と地域医療との連携はますます重要になってくる。一方で、医療従事者は非常に多忙であり、文献検索を体系的に学ぶ機会は多くはなく、情報探索にかけられる時間も少ない<sup>1)</sup>。そのため、病院図書館が学術支援に果たすべき役割、期待される役割(コンピテンシー)は、今後ますます大きくなると考えられる。

ドラッカーは企業とは異なる「予算型組織」である公的機関成功の条件として、以下の6つの規律を挙げている<sup>2)</sup>。

1. 「事業は何か、何であるべきか」を定義する。
2. その目的に関わる定義に従い、明確な目標を導き出す。
3. 活動の優先順位を決める。
4. 成果の尺度を定める。
5. それらの尺度を用いて、自らの成果についてフィードバックを行う。成果による自己管理

さとう まさえ: 司書・ヘルスサイエンス情報専門員(上級)  
sugarain3@gmail.com

を確立しなければならない。

また、ベストセラーにもなった『7つの習慣』<sup>3)</sup>をお読みになった方も多いと思う。どれも当たり前のことばかりだが、ビジネス・フレームワークがわかりやすくまとめられている(表1)。

表1 7つの習慣

第1の習慣	主体的である
第2の習慣	終わりを思い描くことから始める
第3の習慣	最優先事項を優先する
第4の習慣	Win-Winを考える
第5の習慣	まず理解に徹し、そして理解される
第6の習慣	相乗効果を発揮する
第7の習慣	刃を研ぐ

次に、病院図書館の活動の優先順位や目標(ミッションとゴール)を導き出すため、関連法令と図書館に有効と考えられる基本的なビジネス・フレームワークを取り上げる。

### 1. 関連法令など

図1に病院図書館関連の法令の抜粋をまとめた。これに親組織のミッション・ステートメントなどを追加して、提案書に根拠資料として添付できるよう、A4で1~2枚にまとめておくこと便利である。業務運営の方向性を定める判断基準資料としても参照できる。

### 2. 図書館の電子化とエンベディッド・ライブラリアン

図書館情報学分野では、根拠に基づく図書館運営(EBLIP: Evidence Based Library and Information Practice)、通称EBLIP(エブリブ)の活動が広がっている<sup>4)</sup>。EBLIPとは、次のように説明される。「図書館業務に関する回答可能な『質問』を設定し、それを解決するエビデンスを発見し、評価し、活用し、意思決定に適用させる。エビデンスとして統合されるものは、利用者からの報告、実務者の観察、あるいは研究結果から抽出された事実である。このエビデンスの評価に基づいて、図書館の様々な業務、すなわち蔵書構築、レファレンスサービス、利用者教育、マーケティング等を行っていく。」<sup>5)</sup>

資料の電子化は急速に進み、米国では電子書籍の登場で街の書店の多くが姿を消し、皮肉にも図書館が電子書籍の事実上のショールームとなっているという。もはや紙の本ではなくタブレットで本を読み始めた世代が図書館の利用者として登場している<sup>6)</sup>。

また、米国のユタ大学医学図書館は、図書館員の討議による自発的な提案で蔵書の数十万冊をすべて廃棄し、書架を撤去し空いたスペースをイノベーションの場として提供し、図書館員はサポーターやコーディネーターへと役割を変えた<sup>7)</sup>。

こうした図書館員の役割は、エンベディッド・ライブラリアン(Embedded Librarian)、Informationist、Blended Librarianなどと呼ばれ、1970年代に米国の病院図書館に見られるClinical Medical Librarian(臨床医学図書館員)の流れをさらに発展したものといえる。

エンベディッドとは「溶け込む」という意味で、鎌田は「エンベディッド・ライブラリアンとは、日常の業務において、図書館を離れ、利用者が活動している場から、利用者と活動とともにしつづ情報サービスを提供している図書館司書を指す。」<sup>8)</sup>と説明している。エンベディッド・ライブラリアンと聞くと、何か特別なスキルを持って医療現場に飛び込んでいくことを想像して躊躇する方もいるかもしれない。しかし、図書館は医療情報や学術情報を効率よく集めるのには最適な場であり、法的な裏付けのある施設としてその役割を期待されている。中立の立場、利益相反の観点からも、より活用されるべき情報資源と人的資源を備えていることが多い。図書館の環境によっては、カンファレンスやWebセミナーなどの場として提供し、関連した文献や資料のフォローを行ったり、部署に向いて学術的サポートを行うことでエンベディッドへとつなげていくことも可能だろう。

また、ランガナタン『図書館学の五法則』<sup>9)</sup>では、病院図書館は臨床現場にある特性から、第四

図1 病院図書館 関連法令等 抜粋 (下線は筆者による)

■医療法(昭和23年7月法律205号 最終改正  
平成26年6月)

第22条 地域医療支援病院は、前条第1項(第9号を除く。)に定めるもののほか、厚生労働省令の定めるところにより、次に掲げる施設を有し、かつ、記録を備えて置かなければならない。

- 一 集中治療室
- 二 診療に関する諸記録
- 三 病院の管理及び運営に関する諸記録
- 四 化学、細菌及び病理の検査施設
- 五 病理解剖室 六 研究室
- 七 講義室 八 図書館
- 九 その他厚生労働省令で定める施設

第4条(地域医療支援病院について)

- 一 他の病院又は診療所から紹介された患者に対し医療を提供し、かつ、当該病院の建物の全部若しくは一部、設備、器械又は器具を、当該病院に勤務しない医師、歯科医師、薬剤師、看護師その他の医療従事者の診療、研究又は研修のために利用させるための体制が整備されていること。

■医師法第16条の2第1項に規定する臨床研修に関する省令の施行について

第2臨床研修省令の内容及び具体的な運用基準5臨床研修病院の指定の基準(1)基幹型臨床研修病院の指定の基準キ臨床研修の実施に関し必要な施設及び設備を有していること。ただし、共同して臨床研修を行う臨床研修協力施設が医療機関である場合にあっては、当該病院及び臨床研修協力施設が、それぞれの担当する臨床研修の実施に関し必要な施設及び設備を有していること。「臨床研修の実施に関し必要な施設及び設備を有していること」とは、臨床研修の実施に関し必要な施設のほか、臨床研修に必要な図書又は雑誌を有しており、また、原則として、インターネットが利用できる環境(Medline等の文献データベース、教育用コンテンツ等が利用できる環境)が整備されていることをいうものであること。さらに、次に掲げる施設及び設備を備えていることが望ましいこと。(ア)研修医のための宿舎及び研修医室(イ)医学教育用シミュレーター(切開及び縫合、直腸診、乳房診、二次救命処置(Advanced Cardiovascular Life Support: ACLS)、心音又は呼吸音の聴診等の訓練用機材)、医学教育

用ビデオ等の機材

■図書館法(昭和25年4月法律118号 平成20年6月改正)

地方公共団体の設置する図書館を公立図書館といい、日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人の設置する図書館を私立図書館という。

■図書館の設置及び運営上の望ましい基準(平成24年12月19日文科科学省告示第172号)

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/01\\_1/08052911/1282451.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1282451.htm) 四 職員

- 1 私立図書館には、専門的なサービスを実施するために必要な数の司書及び司書補その他職員を置くことが望ましい。
- 2 私立図書館は、その職員の資質・能力の向上を図るため、当該職員に対する研修の機会を確保することが望ましい。

■がん対策基本法第17条(がん医療に関する情報の収集提供体制の整備等)

(がん医療に関する情報の収集提供体制の整備等)  
第十七条 国及び地方公共団体は、がん医療に関する情報の収集及び提供を行う体制を整備するために必要な施策を講ずるとともに、がん患者及びその家族に対する相談支援等を推進するために必要な施策を講ずるものとする。

■病院機能評価 Ver. 6.0 1.5.1.3

図書室機能が適切に発揮されている①必要な書籍・雑誌が確保され、図書情報が一元的に管理されている②新着図書リストなどを各部署に配布・伝達している③図書室は各職種の職員が利用しやすい④必要な文献が容易に検索、入手できる⑤電子媒体を用いた診療支援情報・文献の利用に便宜が図られている

■病院機能評価 Ver. 5.0 4.15

図書室機能 4.15.1 図書室機能が確立している  
4.15.1.1 必要な施設・設備、人員等が整備されている  
4.15.1.2 必要な図書・雑誌が確保されている  
4.15.2 △図書室が適切に運営されている 4.15.2.1 △図書室の利用促進と便宜が図られている 4.15.2.2 △図書部門の業務手順が確立している 4.15.2.3 △図書部門の業務改善の仕組みがある

法則・第五法則が特に重要と考えられる(表2)。

表2 図書館学の五法則(下線は筆者による)

1. 図書は利用するためのものである
2. いずれの読者にもすべて、その人の本を
3. いずれの本にもすべて、その読者を
4. <u>図書館利用者の時間を節約せよ</u>
5. <u>図書館は成長する有機体である</u>

以上のことから、病院図書館においては、長期的視野に立って信頼性の高い学術情報を提供し、組織や地域の医療をサポートするという基本的なミッションがあり、さらに、個々の組織で期待される役割があるといえよう。

### Ⅲ. ビジネス・フレームワーク活用

#### 1. 現状分析：SWOT分析

現状分析にはSWOT(スウォット、スワット)分析が良く用いられる。まず課題のS/W/O/Tを列挙し、次に結果のクロス分析を行い、実際の戦略へとつなげる(図2)。

図2 SWOT分析図とクロス分析

【内部環境】	強み (Strengths)	弱み (Weaknesses)
【外部環境】	機会 (Opportunities)	脅威 (Threats)

  

	強み (Strengths)	弱み (Weaknesses)
機会 (O)	・機会 (O)⇔強み (S) 積極的アピールポイント	・機会 (O)⇔弱み (W): 弱みを克服し、ピンチを チャンスへと変換する
脅威 (T)	・脅威 (T)⇔強み (S): 強みを活かし、脅威を 機会へ変換する	・脅威 (T)⇔弱み (W): 至急手を打って補強す べき弱点

ミッションとゴールが明確になったら、実現に向けた長期計画を立てる。

およそ10年を3~4つのフェーズに分けて、ミッションと機会をもとに落とし込んでいく作業である。第1フェーズ(約3年)が終了した時点で、状況に応じて目標の再確認を行う。個人のキャリア形成にもいえることだが、成果をあげるためには、作業を積み上げるフォアキャ

스팅より、ゴールから逆算して小目標を達成するバックキャストが効率的である。

文部科学省「これからの図書館の在り方検討協力者会議(第8回)」<sup>10)</sup>では、有識者により、図書館員へ対して踏み込んだ次のような提言がされている(表3)。

表3 図書館職員の資質向上と教育・研修

Ⅲ	これからの図書館サービス実現のために必要な取組
3	図書館職員の資質向上と教育・研修
(1)	図書館職員の意識改革
ア	社会の変化に対応して図書館を改革するには、図書館職員の意識改革が必要である。図書館職員は、10年先を展望したり、将来に向けて計画を立てるなど、将来のビジョンを持つこと、社会の動向に注意し、コスト意識を持つことが必要である。
イ	図書館司書をめざす人々のなかには、旧来の図書館のイメージに魅かれています人や貸出・リクエストサービスだけで満足している人も少なくない。新しい図書館に対する展望を持ち、図書館の現状を積極的に改善していく人材が司書となる必要がある。

ただし、派遣職員や非常勤職員の有期雇用の場合など、1年単位で成果を挙げなければならぬこともある。その場合は、1年を4半期ごとのフェーズに分け、着任時や年度ごとにミッションとゴールを共有し、進捗報告を行うべきだろう。最終的には自らの成果と未達項目を報告にまとめ、人件費コストに見合う費用対効果があることを可視化することで次につながる仕事となるのではないだろうか。

実際にはソロ・ライブラリアンや兼務では、日々の業務に追われてしまい、新たなサービスまで余裕がないことも多い。まずは業務日誌に一日・週当たりどの業務にどれくらいの時間をかけているかを計測して記録することで、長期展望に沿って業務の見直しが可能になる。

カイゼンで知られるトヨタ方式には多くの解説本があり、「現場主義」「間接部門は直接部門に対してどんなサービスが提供できるのか」「強い現場を支える強い間接部門はどういうものか」など、業務への意識を考える上でヒントが多

い<sup>11)</sup>。

現業ではない図書館の人的コストを考えると、生産性という観点から見れば、高コストの医療専門職の時間を節約することはコスト削減につながる。レファレンスや検索代行にかかった時間を記録することは、訓練された図書館担当者が行うことで、より効率的に結果を得られるという実績にも、担当者のスキル向上を測る物差しにもなる。

病院では、異動や派遣など短期的なキャリアとしてたまたま図書館業務に携わることも多いと思われるが、信頼性の高い情報を短時間で探索し整理するというスキルは、どの仕事においても個人の生活においてもきわめて有用であるので、研鑽のチャンスを生かしていただければと思う。

では、ミッションを果たすためにどのようにエンベディッド・ライブラリアンを目指すか？次に具体的なビジネス・フレームワークを用いて戦略を考えてみる。

## 2. 利用者マーケティング：ブルー・オーシャン戦略/ペルソナ法、シナリオ法

Green<sup>12)</sup>は「図書館利用を阻害する要因」として、以下を挙げている。

- (1) 物理的要因
- (2) 個人的環境
- (3) イメージと認知

このうち、(3)が最も影響が大きいという。英国の公共図書館の研究だが、日本の病院図書館にも当てはまる要因である。

図書館の認知と存在感を高めるには、利用者が必要としているか、マーケティングとイメージ戦略を考える上で、「ブルー・オーシャン戦略」<sup>13)</sup>を紹介したい。競争の激しいレッド・シーでなく、強みを発揮できるブルー・オーシャン市場を開拓することの重要性がわかる。また、顧客のセグメンテーション・ターゲティング・ポジショニングのほか、非顧客を顧客にするためには、消極的顧客・利用しないと決めている顧客・市場から距離を置く顧客に分け、そ

れぞれの共通点を見つけて対応することで成果が上がると述べている。組織の4つのハードル（意識、経営資源、士気、政治的）など、非常に幅広い経営戦略論であり、図書館経営にも参考になる。

ペルソナ法、シナリオ法は、Webサイト構築などで使用されるイメージ・マーケティングの手法である。仮の利用者を具体的に詳細なプロフィールまで想定し、その行動パターンや動線を時系列で考える。新たな企画を考える際、ターゲットと期待される成果を明確にするために有効である。

## 3. 企画：全体最適と部分最適

「ザ・ゴール—企業の究極の目的とは何か」<sup>14)</sup>は、物語仕立てで部署だけの部分最適でなく、組織や社会の全体最適の観点からの運営を考えさせられる。組織の繁栄なくして、一部門である図書館の繁栄はないと実感できる。

## 4. 企画・提案：MECE/So What, Why So?

ロジカル・シンキング、ロジカル・ライティングは解説本が多数出ている<sup>15)</sup>が、図書館から企画提案する際には、特に次の2点を意識したい。

・MECE (ミッシー/Mutually Exclusive and Collectively Exhaustive)

もれなく、重複なく問題点を整理した状態を「MECEである」という。

・So What? Why So?

根拠をもとに結論を出す、結論の根拠を明らかにして示す技術である。想定される質問への準備、目的の確認など、提案や交渉時には、言いたいことだけでなく相手の疑問に答える必要がある。

## 5. 広報：スリーヒット理論/エレベーター・ブリーフィング

図書館だより・アンケートを広報手段にしている図書館は、有効に活用されているだろうか？図書館の認知度が低い場合、緊急性の低い案内が頻繁に届くことは、多忙な臨床現場では「図書館＝後回しで良い」刷屏込みの危険がある。また、回収率の低いアンケートでは、単なる人

気投票になり、結果的に利用者の満足度を高められない可能性はないだろうか。

Krugman の広告のスリーヒット理論<sup>16)</sup>によれば、接触頻度の閾値はターゲットによるものの、1回目の接触で注意を引く・2回目の接触で興味を喚起・3回目で行動に結びつくという。

また、エレベーター・ブリーフィングはエレベーター・ピッチ、エレベーター・レポートなどとも呼ばれ、有効な手段である。数分程度の立ち話で必要な情報(や相談)を過不足なく伝える訓練にもなり、相手が会話の終了時間の見通しを持てるため、受け入れられやすく、また伝えやすい。その際は、テーマを初めに明示する、数値は即答できるように準備する、複数の代替案を用意しておくことが重要だろう。

#### 6. 交渉：Win-Win, or No Deal/BATNA/ZOPA

業務に限らず、日々の生活は交渉の連続である。交渉は大きく、勝ち・負けの「配分型交渉」と「統合型交渉」に分類される。

「7つの習慣」第4に Win-Win の考え方が解説されているが、これは「統合型交渉」であり、図書館のステークホルダー(利用者・業者・組織)がいずれも納得する形でなければ、時期尚早として見送ること(No Deal)も選択肢として考えられる。

いずれにせよ、交渉の前準備として、BATNA(バトナ/Best Alternative To a Negotiated Agreement、交渉不調時の代替案)と ZOPA(ゾーパ/Zone Of Possible Agreement、合意可能領域)<sup>17)</sup>を意識して準備しておくことが必要である。

#### 7. クリック&モルタル戦略、オムニチャネル戦略

電子ジャーナルの普及に伴い、図書館利用者数が減少するという課題がある。ユタ大学の例に見るように、そもそもは全体最適から見て図書館空間が何のためにあるのかを再考する必要があるだろう。

クリック&モルタル(電子商取引と実店舗)の相乗効果、さらにオムニチャネル、即ちインターネット、店舗、カタログなどのあらゆる(オムニ)経路(チャネル)で消費者と接点を増

やす手法が急速に広がっている。電子化された図書館をより活性化するためにも、先進的な企業の取り組みは参考になる。

#### IV. 自己研鑽：刃を研ぐ

ドロッカーは、「見習い期間をすぎれば、自らの仕事については上司より詳しくなければならぬ。さもなければ無用の存在となる。誰よりも詳しいことこそ、知識労働者の知識労働者たるゆえんである」「成果をあげるための原則を知ればよい。何に貢献すべきかを明らかにし、何に集中すべきかを定め、目線を上げればよい」<sup>18)</sup>と述べている。

「何かに対して《使命》を感じるとはどういうことであろうか？それは何が《正しく》何が《最善》であるかという、あなた自身が持っている高い理念を達成させるために自分の仕事をすることであり、もしその仕事をしないでいたら『指摘される』からするのではない、ということではなかろうか」<sup>19)</sup>

これは、ナイチンゲール『看護覚え書』(1860年)の一節である。ビジネス書として読むと非常に興味深く、示唆に富んだ1冊である。

病院図書館の業務は幅広く、読者の皆さまもさまざまな学びのスタイルをお持ちのことと思う。近畿病院図書館協会をはじめとする職能団体には、日本医学図書館協会(JMLA)、日本病院ライブラリー協会(JHLA)、日本図書館協会(JLA)、日本看護図書館協会(JNLA)、専門図書館協会(JSLA)などがあり、おのおの教育研修事業を行っている。

JMLAが運営・認定するヘルスサイエンス情報専門員(JHIP)は、米国のAHIP制度をモデルにした資格で、医学図書館員の専門性を客観的に証明するものである。司書の有資格者は毎年約1万人以上誕生するが、JHIPは自らの医学図書館員としての実績を形にし、ブルー・オーシャンのキャリアとなる可能性があるだろう。また、JMLAは受託事業として、診療ガイドライン制作のためのシステムティック・レビュー

を行っている。プロフェッショナル養成講座というべき検索上級コースで訓練を積み、診療ガイドライン作成を通じて図書館員の立場から医療にも貢献できる。

社会人大学・大学院の増加、Moocsの登場など、働きながら学ぶ環境も整ってきている。筆者は仕事上の新しい分野の主題知識は、研修会のほか、放送大学の通信教育やスクーリング授業などで得てきた。正規の学生であれば、国際会議参加費などの優遇も受けられる。最近では“NEJM Knowledge+”のようなe-learningツールも登場して論文の学び方も多様化している。

研修会参加が困難な場合は国内外のメーリングリスト(MEDLIB-L, MEDLIB-Jなど)やSNSでも限定的な情報収集は可能であろう。

## V. 海外の大会・研究会に参加する

国内だけでなく海外の図書館情報学関連の会議に参加することもおすすめしたい。世界のライブラリアンと交流することで、自館・自分の強みや不足している技能・知識も把握できるし、エクスカーションでは図書館見学など、単なる観光ではできない経験ができる。身近な業務の中にこそ、EBLIPの研究の種はあるとわかる。筆者も研究会などで発表への質問から始め、グループ研究やベテランの実務者との共同研究や執筆などを通して学ぶことで、少しずつ扉が開くことを実感してきた。

## VI. まとめ

ここまで、主に初任者に向けて小規模な病院図書館におけるビジネス・フレームワーク活用を紹介した。期待できる効果をまとめると以下の通りである。

- ・果たすべき目的(ミッションとゴール)が明確になる。
- ・根拠に基づき、長期的・俯瞰的な視点で図書館経営ができる。
- ・ビジネスパーソンとして、経済社会や経営側の共通言語で話せる。

- ・主体的に行動でき、一人部署のストレスが軽減される。

なお、図書館のアウトカム指標(図書館パフォーマンス指標の国際規格ISO11620、マーケティング分野のサービス品質評価手法であるSERVQUALを改変したLibQUAL+、図書館情報サービスの医療アウトカムへの効果測定研究など)については、今回は紙数の都合で取り上げなかった。

## VII. おわりに

「親切にしないで。あなたの会おう人は皆、厳しい戦いの中にあるのだから。」とは、プラトンの言葉といわれる。筆者は病院に勤務してからこの言葉を毎日反芻している。病院図書館のソロ・ライブラリアンは困難も多いが、利用者との距離が近く、スピード感があり、自分が学び成長することで情報プロフェッショナルとして医療現場へ貢献できる。あらゆる館種の中でも非常にやりがいのある図書館であることを実感している方も多いただろう。

筆者自身、試行錯誤の連続であり、よりよい図書館運営についてご意見やご教示をいただければ幸いである。情報をシェアすることで、病院図書館全体がより活性化することを願ってやまない。

## 謝辞

MIS31発表後コメントをお寄せくださった多くの方々、執筆の機会を与えてくださった編集部、最後までお読みいただいた読者の皆さまに心から感謝します。

## 参考文献

- 1) 橋本淳:【EBMとEBH】EBMの実践とEBH. 公衆衛生研究. 2000;49(4):320-8.
- 2) P.F.ドラッカー, 上田惇生編訳. マネジメント基本と原則 エッセンシャル版. 東京:ダイヤモンド社;2001.
- 3) スティーブン・R・コヴィー, フランクリン・コヴィー・ジャパン訳. 完訳7つの習慣:人格主義の回復. 東京:キングベアー出版. 2014.

- 4) 酒井由紀子. EBM から EBL/EBLIP (前編) : 医学図書館員による Evidence-based Practice の支援. 情報管理. 2008; 51(1) : 2-10.
- 5) 依田紀久. CA1625. 根拠に基づいた図書館業務の設計—実践家の成果の共有を目指す EBLIP の動向—カレントアウェアネス. 2007; 291(3). [引用 2014-09-30].  
<http://current.ndl.go.jp/files/ca/ca1625.pdf>
- 6) Fowler GA. なぜアマゾンより図書館の方が勝っているのか—今のところ. The Wall Street Journal. 2014/8/14. [引用 2014-09-30].  
[http://jp.wsj.com/news/articles/SB10001424052702303959804580090492319685022?mod=WSJ\\_article\\_EditorsPicks](http://jp.wsj.com/news/articles/SB10001424052702303959804580090492319685022?mod=WSJ_article_EditorsPicks)
- 7) ユサコ. USACO Academic Seminar 2014. [引用 2014-09-30].  
[https://www.usaco.co.jp/Seminar\\_Jean\\_Shipman\\_report.html](https://www.usaco.co.jp/Seminar_Jean_Shipman_report.html)
- 7) Jarvis C et al. : Books to Bytes at the Speed of Light : A Rapid Health Sciences Collection Transformation. Collection Management. 2014; 39(2-3) : 60-76.
- 8) 鎌田均. CA1751—動向レビュー : 「エンベディッド・ライブラリアン」 : 図書館サービスモデルの米国における動向. カレントアウェアネス. 2011; (309). [引用 2014-09-30].  
<http://current.ndl.go.jp/ca1751>
- 9) S. R. ランガナタン. 森耕一訳. 図書館学の五法則. 東京 : 日本図書館協会 : 1981.
- 10) 文部科学省. 「これからの図書館の在り方検討協力者会議 (第 8 回)」 配付資料 [資料 2] -3-3 図書館職員の資質向上と教育・研修. [引用 2014-09-30].  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/tosho/giron/05080301/001/006.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/giron/05080301/001/006.htm)
- 11) 若松義人. 最強の現場をつくり上げる! トヨタ式「改善」の進め方 (PHP ビジネス新書 032). 東京 : PHP 研究所 : 2007.
- 12) Green T. Images and perceptions as barriers to the use of library and services. New Library World. 1994; 95(7) : 19-24.
- 13) W. チャン・キム, レネ・モボルニュ : 30 業種 100 年の歴史が教える ブルー・オーシャン戦略. Diamond ハーバード・ビジネス・レビュー 2005; 30(1) : 20-33.
- 13) W. チャン・キム, レネ・モボルニュ. 有賀裕子訳. ブルー・オーシャン戦略 競争のない世界を創造する (Harvard business school press). 東京 : ダイヤモンド社 : 2013.
- 14) エリヤフ・ゴールドラット. 三本木亮訳. ザ・ゴール 企業の究極の目的とは何か. 東京 : ダイヤモンド社 : 2001.
- 15) 照屋華子, 岡田恵子. ロジカル・シンキング 論理的な思考と構成のスキル. 東京 : 東洋経済新報社 : 2001.
- 15) 照屋華子. ロジカル・ライティング 論理的にわかりやすく書くスキル. 東京 : 東洋経済新報社 : 2006.
- 16) Krugman HG. Why three exposures may be enough. Journal of Advertising Research. 1972; 12(6) : 11-4.
- 17) ロジャー・フィッシャー. ウィリアム・ユーリー, 金山宣夫他訳. ハーバード流交渉術 (知的生きかた文庫). 東京 : TBS ブリタニカ : 1989.
- 18) 上田惇生. ドラッカー時代を超える言葉 洞察力を鍛える 160 の英知. 東京 : ダイヤモンド社 : 2009.
- 19) ナイチンゲール. 湯楨ます他訳. 看護覚え書 看護であること・看護でないこと. 改訳第 6 版. 東京 : 現代社 : 2000.